

國學院大學學術情報リポジトリ

浅井了意『狗張子』の出典に関する再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード (Ja): 浅井了意, 狗張子 , 出典 , 適吉録 , 五朝小説 キーワード (En): 作成者: 蔣, 雲斗, Jiang, Yundou メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000492

浅井了意『狗張子』の出典に関する再考

Reconsidering the Sources of Asai Ryōi's *Inu Hariko*

蒋 雲 斗

キーワード：浅井了意 狗張子 出典 迪吉録 五朝小説

关键词：浅井了意 狗张子 出典 迪吉录 五朝小说

要旨

『狗張子』は浅井了意の遺作であり、仮名草子時代の締めくくりの作品でもある。『伽婢子』と同様に、『狗張子』で取り上げられた中国古典籍は非常に多様である。『伽婢子』と比較して、了意は『狗張子』においてより柔軟かつ多様な翻案手法を展開している。そのため、『狗張子』は『伽婢子』と並び、江戸時代の翻案作品としての白眉と言えよう。了意が原典の内容を大幅に改変したため、現在まで『狗張子』の出典に関しては多くの未解決の問題が残っている。本稿では、了意が使用した中国古典籍を分析し、よく用いられる中国古典籍の特徴を明らかにし、『迪吉録』および『五朝小説』が『狗張子』の出典であることを論じてみた。

摘要

《狗张子》是浅井了意的遗作，也是假名草子时代的收官之作。与《伽婢子》相同，《狗张子》所涉汉文典籍也十分多样。与《伽婢子》相比，了意在《狗张子》中所体现的翻案手法更加灵活多变。因此，《狗张子》可与《伽婢子》并称江户翻案作品之白眉。正是由于了意对原典内容改写的幅度较大，时至今日关于《狗张子》的出典仍有很多问题未解。本文在分析了了意所用汉文典籍的基础上，分析了意常用汉文典籍的特点，进一步证明《迪吉录》与《五朝小说》也是《狗张子》之出典。

はじめに

『狗張子』は浅井了意の遺作であり、その円寂の翌年である元禄五年（1692）に刊行された。また『犬張子』や『狗波利子』とも呼ばれている。『狗張子』の刊行は、仮名草子時代の実質的な終焉を象徴しており、日本文学史における意義は非常に大きいと言えよう。『狗張子』は七巻から成り立ち、刊行者である京都の書肆林義端の序文と浅井了意自身による序文が含まれている。林義端は江戸中期の浮世草子作者であり、伊藤仁斎に儒学を学んだ者であり、怪談小説『玉櫛笥』『玉箒子』

を執筆し、『搏桑名賢詩集』などを編集した。林義端の序文には「去年庚午の春。往に編集せる『伽婢子』の遺せるを拾ひ、漏れたるを搜りて。『狗張子』若干巻を作り、その続集に擬んとす。その年の冬に至り、既に七巻を撰び輯む。」⁽¹⁾と記されている。これによれば、『伽婢子』(1666)の典拠が『狗張子』の典拠になる可能性も高いことを示唆している。一方、『狗張子』は了意晩年の作品であり、彼がよく利用した『堪忍記』(1655)の典拠である『迪吉録』の影響を受けていると考えられる。

そこで、本稿では先行研究を基に、浅井了意が利用した中国古典籍の特徴を明らかにし、『五朝小説』および『迪吉録』が『狗張子』の出典であることを論じてみたいと思う。

一、『狗張子』の出典をめぐる問題

『狗張子』の出典に関する研究は、山口剛氏による『怪談名作集』に始まる。山口氏は『伽婢子』と『狗張子』について詳細な論考を行い、『狗張子』の出典研究の基礎を築いた。特に、山口氏は『伽婢子』の典拠である『剪灯新話』の続編『剪灯余話』が『狗張子』の典拠になる可能性が高いと指摘している。⁽²⁾一方、麻生磯次氏は、山口氏の見解と異なり、『狗張子』が『伽婢子』の続編とされているものの、『剪灯余話』の影響はそれほど大きくないと明確に指摘した。⁽³⁾麻生氏は、研究の視野を広げ、了意の作品と『太平広記』『古今奇観』『古今説海』『唐人説薈』などの小説集や、馮夢龍の作品との関係を研究すべきだと主張している。ただし、麻生氏は上述の典籍と『狗張子』の出典関係を詳細に分析しておらず、その結論にはまだ多くの議論の余地が残っている。その後、富士昭雄氏は『狗張子』に関連する中国の古典について総合的に考察し、『稽神録』『続玄怪録』などの中国の古典も『狗張子』の出典である可能性もあると指摘した。また、同氏は『本朝神社考』『本朝故事因縁集』『甲陽軍鑑』『元亨釈書』『太平記』などの日本の古典も『狗張子』の出典である可能性を示唆している。⁽⁴⁾江本裕氏は「『狗張子』注釈(一～五)」では、

(1) 朝倉治彦編『仮名草子集成』(第四巻)、東京堂出版、1983年、第29頁。

(2) 山口剛編『怪談名作集』(日本名著全集)、日本名著全集刊行会、1927年、第65-95頁。

(3) 麻生磯次『江戸文学と支那文学：近世文学の支那的原拠と読本の研究』、三省堂、1946年、第33-39頁。

(4) 富士昭雄『浅井了意の方法——『狗張子』の典拠を中心に』、『名古屋大学教養部紀要 A 人文

『狗張子』に収録された物語に多角的な注釈を施した。⁽⁵⁾ 中国の『博異記』や日本の『武者物語』『新語園』なども『狗張子』の出典であるとの見解を示しているが、これらの論文は注釈を主としており、出典関係については詳しく論じていない。

一方、林義端は『狗張子』の序文で、『狗張子』が『伽婢子』の続集であることを指摘している。したがって、『伽婢子』の典拠と『狗張子』の対応関係については、より深く研究する必要がある。『伽婢子』翻案の典拠に関しては、従来、宇佐美三八氏⁽⁶⁾によって総合的に考察された論があり、その多くが解明された。宇佐美三八氏の指摘は各話ごとに典拠を詮索する方法を取ったが、その後における先学諸氏の研究は叢書の利用の可能性を指摘する動きが中心となった。麻生磯次氏⁽⁷⁾は、『古今説海』『唐人説薈』が『伽婢子』の原典に利用されたことを指摘し、渡辺守邦氏⁽⁸⁾は、『説郭』が『伽婢子』の原典に利用されたことを指摘している。王建康氏⁽⁹⁾はそれらの説に反対して、『太平広記』が主要な原典であると論じられた。そして、黄昭淵氏の論文『『伽婢子』と叢書——『五朝小説』を中心に——』⁽¹⁰⁾により、出典については『五朝小説』(主に「存唐人百家小説」及び「存宋人百家小説」)との関連が重要であることがより一層明らかになった。ここに『五朝小説』との関連は、ほぼ解明に近づいたといえる。『伽婢子』の典拠である『五朝小説』が『狗張子』との関係はどうなっているか。江本裕氏の指摘⁽¹¹⁾により、『狗張子』第七卷の「蜘蛛塚」の出典が『博異志』の中の「木師古」であることが分かる。『博異志』の内容は、浅井了意によって何度も『伽婢子』に取り入れられており、了意が使用した『博異志』は『五朝小説』の「存唐人百家小説」第六卷に収められている『博

科学・社会科学』(11)、1967年；「伽婢子と狗張子(近世小説——方法と表現技巧)」、『国語と国文学』(48)、1971年。

- (5) 江本裕「『狗張子』注釈(一)」、『大妻女子大学紀要』(文系31)、1999年；「『狗張子』注釈(二)」、『大妻女子大学紀要』(文系32)、2000年；「『狗張子』注釈(三)」、『大妻女子大学紀要』(文系33)、2001年；「『狗張子』注釈(四)」、『大妻女子大学紀要』(文系37)、2005年；「『狗張子』注釈(五)」、『大妻女子大学紀要』(文系38)、2006年。
- (6) 宇佐美三八「『伽婢子』における翻案について」、『和歌史に関する研究』、若竹出版、1952年。
- (7) 麻生磯次「怪異小説の支那文学翻案の態度及び技巧」、『江戸文学と中国文学』、三省堂、1976年。
- (8) 渡辺守邦「浅井了意『伽婢子』——渡来した妖異」、『国文学 解釈と教材の研究』(37)、1922年。
- (9) 王建康「『太平広記』と近世怪異小説——『伽婢子』の出典関係及び道教的要素——」、『芸文研究』(64)、1994年。
- (10) 黄昭淵「『伽婢子』と叢書——『五朝小説』を中心に——」、『近世文芸』(67)、1998年。
- (11) 江本裕「『狗張子』注釈(五)」、『大妻女子大学紀要』(文系38)、2006年。

異志』と同じである。したがって、「蜘蛛塚」の出典も『五朝小説』であると考えられる。さらに、『狗張子』第七巻の「鼠の妖怪」の出典が『稽神録』の中の「田達誠」であると指摘され、⁽¹²⁾「田達誠」も『五朝小説』に収録されている。したがって、『狗張子』第七巻の「蜘蛛塚」と「鼠の妖怪」の出典も『五朝小説』であり、『五朝小説』も『狗張子』の出典の一つであると言えよう。

二、『堪忍記』の出典に関する一考察

『狗張子』の出典に関する研究は成果が豊かであるものの、まだ多くの物語の出典が解明しにくいいため、研究者は類話研究に関心を持っている。先行研究の成果によれば、『狗張子』の物語はほとんどが少なくとも一つ以上の類話を持っている。『狗張子』の物語の中で、第四巻の「不孝の子狗となる事」は最も特別である。「不孝の子狗となる事」と『堪忍記』第六巻の「滑州の狗頭新婦が事」はテーマが同じく、「孝」であり、どちらも母親に対して不孝な人が天罰を受けて犬に変わる話である。しかし、このような特別な物語が目立たず、今日までこれに関する研究があまり見られなかった。以下では、この二つの物語の筋を出発点として分析してみたい。

まず、『堪忍記』第六巻の「滑州の狗頭新婦が事」を分析しておきたい。「滑州の狗頭新婦が事」の出典は『迪吉録』第八巻の公鑑四の女鑑門の「酸棗婦雷換犬頭」とされている。⁽¹³⁾類話としては、『冥報記』『太平広記』『独異記』『法苑珠林』などの中国の古典や日本の古典である『鑑草』にも見られる。『独異記』上巻の「賈耽為滑州節度使」と『迪吉録』の「酸棗婦雷換狗頭」の内容は一致しており、同じ系統に属すると思われる。『法苑珠林』の「隋大業中」の一節の出典は『冥報記』であり、『冥報記』の内容と一致しているのも同じ系統に属する。『鑑草』巻一孝逆の報「滑州酸棗県」は『迪吉録』の内容に基づいて翻案したものである。各系統から一例ずつ分析を行う。『太平広記』中の「河南婦人」の出典は『冥報記』だと記載されているが、表現が若干異なるうえ、『太平広記』が了意によって使用された可能性があ

(12) 江本裕『『狗張子』注釈(五)』、『大妻女子大学紀要』(文系38)、2006年。

(13) 小川武彦『『堪忍記』の出典上の1——中国種の説話を中心に』、『近世文芸研究と評論』(10)、1976年；『『堪忍記』の出典上の2——中国種の説話を中心に』、『近世文芸研究と評論』(13)、1977年。

るため、『太平広記』中の「河南婦人」と『冥報記』下巻の「隋河南人婦」の原文を参考しながら、検討してみよう。原文は以下のようにあげられる。

例 1

(1) 『堪忍記』巻第六・女鑑上・姑につかふる堪忍第廿一・滑州の狗頭新婦が事
 A. 滑州の酸棗県（註）といふ所の民、B. その妻いたりて不孝のものなりけり。姑は、年はなはだかたふきて、両眼つぶれたり。新婦これをにくみあなづり、物ことにつらくあたり、いさかひどよみければ、姑は只啼より外の事なし。ある時、夫の田に行ける跡に、C. 食をそなふるとて、にくさのあまりにや、食の中に犬の糞をつきまぜてさづけたり。姑その味のあしく、匂ひ常ならざりければ、ひそかに食ずして、わが子のかへりたるを待て、これは何やらん喰れもせず、味あしく、きたなうさきそやとて見せたり。子はこれを見るより涙を流して、さてなさけなき事をいたしける者かな。両眼なければとて、かかる物うきめ見せける事よとて、声うちあげてなきける所に、D. 天井より熊の手のごとくなるくろき手をいだし、新婦がかうべをひつさげてあがる。あらかなしといふ声のみのこりて見えず。こはおそれて、母をかきいだきにげ出つつ、暫らくありて内に入て見れば、妻が衣裳はもとのことく、手足もかはらず、E. 首ばかりぬきかへられて、狗の頭となりて、踞をして居ける。その所の奉行はF. 賈耽（註）といふ人なり。やがてG. 此新婦が首に繩をつけ、國中を曳きめぐらして、姑に不孝なるものいましめと見せらる。H. 狗頭新婦とて、世にかくれなし。⁽¹⁴⁾

(2) 『適吉録』第八卷公鑑四女鑑門『酸棗婦雷換狗頭』

f. 賈耽（註）爲a. 滑州節度。a. 酸棗縣b. 有俚婦事姑不敬, c. 姑年甚老, 無雙目。旦食, 婦以食裏犬糞授姑。姑食之, 覺有異氣, 其自出遠還, 姑問其子此何物, 向者婦與吾食。其子仰天大哭。有頃, d. 雷電發, 若有人截婦首, e. 以犬續之。f. 耽g. 令牽行于境內, 以告不孝者時人謂之h. 狗頭新婦。⁽¹⁵⁾

(14) 浅井了意全集刊行会編『浅井了意全集』（仮名草子編1）、岩田書院、2007年、第139-140頁。

(15) 明・顔茂猷『適吉録』（内閣文庫蔵崇禎四年刊）を参照。

(3) 『冥報記』下卷『隋河南人婦』

隋大業中、河南人婦養姑不孝。姑兩目盲、婦切蚯蚓以爲羹以食、姑怪其味、竊藏一罇、留以示兒。兒還見之、欲送婦詣縣。未及、而雷震、失其婦。俄從空落、身衣如故、而易其頭爲白狗頭。言語不異。問其故。答雲：“以不孝姑。爲天神所罰。”夫以送官、時乞食于市、後不知所在。⁽¹⁶⁾

(4) 『太平広記』卷第一百六十二感應二『河南婦人』

隋大業中、河南人婦養姑不孝。姑兩目盲、婦切蚯蚓以爲羹以食、姑怪其味、竊藏一罇、留示兒。兒見之號泣、將錄婦送縣。俄而雷雨暴作、失其所在。尋見婦自空墮地、身及服玩如故、而首變爲白狗、言語如恒。自雲：“不孝于姑、爲天神所罰。”夫乃斥去之。後乞食于道、不知所在。出《冥報記》⁽¹⁷⁾(17)

上記のとおり、(1)は『狗張子』の原文、(2)は『迪吉録』の原文、(3)は『冥報記』の原文、(4)は『太平広記』の原文である。(3)と(4)は(1)と(2)の類話である。(1)と(2)の物語の梗概は次のように要約できる。河南酸棗県の農婦は盲目の姑に非常に不孝であり、夫が外出中に姑に犬の糞を食べさせた。姑が異変に気づき、食べ物を残して息子に見せた。息子はそれを見て大泣きし、妻を官府に送ろうとする。突然、天に異変が起き、農婦は犬頭人にならった。夫は彼女を官府に連れていき、官吏の賈耽は「犬頭新婦」を町中に引き回すよう命じた。(3)と(4)の物語の梗概は(1)と(2)とほぼ同じであり、二つの細部が異なっている。一つは食べ物異なること。(1)と(2)では農婦が姑に犬の糞を食べさせ、(3)と(4)では蚯蚓の羹を食べさせた。いま一つは犬頭の色である。(1)と(2)では婦人を「犬頭新婦」と呼ぶが、犬頭の色については言及していなかった。一方、(3)と(4)では犬頭の色が白色であることを明確に指摘しているが、「犬頭新婦」と呼ばれる細部については言及していなかった。実は、中国の古典小説において、白犬が邪悪の象徴として頻繁に登場することが多い。⁽¹⁸⁾

また、(1)と(2)は二つの重要な点が異なっている。一つは頭の交換方法である。(2)では雷電の中で婦人の頭を切り取って犬頭に変えたが、浅井了意は天井

(16) 唐・唐臨撰『冥報記』、中華書局、1992年、第56頁。

(17) 宋・李昉等編『太平広記』、中華書局、1961年、第1167-1168頁。

(18) 元偉「犬奸故事的源流及其意義」、『蒲松齡研究』(03)、2017年。

から伸びた熊の手のような黒い手が婦人の頭を持ち上げると翻案した。顔茂猷の『迪吉録』第七巻の公鑑二の取財門の「崔屠詐取贖母之金雷震死」の末尾に「雷能殺人、又能生人」と評している。顔茂猷は「雷」が生命の輪廻の重要な方法を強め、雷電の中で人が婦人の頭を切り取って犬頭に変える詳細は彼の「雷は人を殺すことも、生むこともできる」という観点と非常に合致している。だが、了意は熊の手のような黒い手を強調している。了意の作品において熊は三種類のイメージがあり、一つは食物としての熊の掌である。『狗張子』第一巻の「足柄山」には「猩唇熊掌」の美味しそうな料理の描写があるが、明らかにこの例の「熊の手」とは関係がない。もう一つは助けになる熊である。『孝行物語』第五巻の「林祐」では、孝子の林祐を洞窟から救う熊が描かれている。『浮世物語』第四巻の「人は万物にすぐれたる事」では、了意が世間の動物について「獅子の威ある、虎の武き、熊のすごやかなる、狐の妖なる、猩猩の人に似たる、猿猴の才ある」と評している。⁽¹⁹⁾ 上記の意向を重ね合わせると、了意の作品における熊は「孝子を助け、かつ強健」というイメージである。『箋注倭名類聚抄』によって、熊については「犬身人足」とされており、⁽²⁰⁾ 日本古来から「熊の手」は「人の足」と比較されていると言えよう。了意は雷震の中で無形の手代わりに熊の手を使い、孝子を助ける熊の手で不孝な婦人を罰することで物語の面白さを増し、「不孝には悪い報いがある」という善を説く思想をより良く表現していると考えられる。さらに、(1)は(2)にない詳細な描写が追加されており、(1)の波線部分に示されているように、「こはおそれて、母をかきいだきにげ出つつ、暫らくありて内に入れて見れば…」ような詳細な描写は(2)には見いだせなく、文学性を強化すると同時に、孝子のイメージを際立たせ、不孝な婦人のイメージと鮮明な対比を形成している。

以上より、『堪忍記』中の「酸棗婦雷換狗頭」と『迪吉録』中の「滑州犬頭新婦」の相違点を分析し、上述の二つの物語と類話(3)(4)を比較研究して、(2)が(1)の出典であることを確認し、(1)が(3)と(4)の違いを明らかにした。

(19) 谷脇理史等校『仮名草子集』、日本古典文学全集64、小学館、1999年、第195頁。

(20) 神宮司庁編『古事類苑』(50)、古事類苑刊行会、1908-1930年、第403頁。

三、『狗張子』第四卷の「母に不孝狗となる」の出典の再考

浅井了意の作品における犬のイメージはネガティブであり、『狗張子』第一巻の「北条甚五郎出家」には「我業因ったなくして、犬と生まれ」と書かれている。僧侶である浅井了意は、善行を行わない人が犬に転生すべきと考えている。よって、『堪忍記』に不孝な人が犬頭になる描写があり、『狗張子』にも再び不孝な子が犬に変える話、即ち第四卷の「母に不孝狗となる」が挙げられる。以下では「母に不孝狗となる」の出典と指摘される⁽²¹⁾『本朝故事因縁集』第五巻の「洛外人為犬」と比べてみたい。「母に不孝狗となる」と「洛外人為犬」の原文を以下に記しておく。

例 2

(5)『狗張子』第四卷の「母に不孝狗となる」

A. 永正年中に、都の西鳴滝といふ所に、彦大夫とて百姓あり。有徳にはあらねども、又世をわたるに人なみの身すぎをいたせし。田畠よくつくりて住けり。その生れつき無道にして、神仏の事、更にうやまひ貴とむ心なし。さるままにあたりちかき寺にもまひりたる事もなく、乞食・非人の来るをも、あらけなくののしり、すこしのめぐみをほどこしあたふる事をしらず。

B. 母をやしなふに、不孝なる事いふはかりなし。只明暮つらめしくあたりて、わづかにも心にたがふ事あれば、ことの外にいひ恥かしめ、母の年かたふきて、よろづつたなきを見ては、はやく死して隙をあけよかし、娑婆ふさげに無用の長生かなと、のろひいましむる事毎日なり。母これを聞に物うさ限りなく、汝は誰うみそだててかくは聞ゆらん。つれなく命の生ける事よと、我身を恨みて涙をおとさぬ日もなし。C. 母やまひにかかりて、食のあちはひ心よからず、新婦をたのみて、ひとえの衣をうりて、そのあたひを彦大夫にわたし、D. これにて魚を買もとめてくれよといひしを、魚のあたひは取ながら、魚は更にもとめあたへず、隣の人あはれがりて鯉の羹ものをつくりて来りあたふるに、母にはまいらせずして、E. をのれぬすみてみなくひつくしけり。たちまちに腹をいたみ、さまざま薬もちゆれとも、そのい

(21) 富士昭雄「伽婢子と狗張子(近世小説——方法と表現技巧)」、『国語と国文学』(48)、1971年。

たみ少もやみたるけしきなく、F. 吟臥て、くらき闇のうちに籠り、夜る昼
五日のうちうめきけるを、人行ていかに間に、その身変じて狗となり、蹲ま
りて恥かしげにみえけるを、食ものをあたふれどもくはず、百日を経て死に
けり。不孝のむくひ目の前にありと、たがひにおそれおどろき、親ある人は
 皆かうかうをいたしけるとぞ。⁽²²⁾

(6) 『本朝故事因縁集』第五卷「洛外人為犬」

a. 永正年中、城州嵯峨ノ辺ニ無道ノ者アリ。 b. 父母ニ不孝ニシエ、 兄弟ニ
 親マズ。或ル時、c. 父病テ求食為薬食ハント徧ヲ吾子ニ乞フ。 嘗テ不出他人
 求テd. 美物ヲ調フ。 e. 其子盗テ食之、忽チ病テ伏コト。 f. 五日、暗キ闇ニ卧
テ不出。人怪テ見之為犬。終ニ辱人百日ニシテ、死スト云云。

評曰：不孝ノ者ニ非ズ、況ヤ親薬食ヲ求ム。子盗エ食フ、誠ニ犬ナリ。異
 国ニモ例アリ。隋大業ノ中、河南ノ女人姑ヲ養テ、不孝ナリ。姑盲目ナリ。
 或時蚯蚓ヲ求メ姑ニ食シム時ニ、天雷暴雨シテ。彼女人ヲ雲捲揚テ失ヌ。亦
 日ヲ経テ、虚空ヨリ落ス。見之、其面犬トナリ。終自害シテ死ト云云。⁽²³⁾

上記のとおり、(5)は『狗張子』第四卷の「母に不孝狗となる」の原文であり、
 (6)は『本朝故事因縁集』第五卷の「洛外人為犬」となる。(5)中のABCDEFの
 六箇所はそれぞれ(6)のabcdefに対応している。(6)のa「永正年中、城州嵯
 峨の辺に無道な者あり」という部分と比較して、浅井了意は(5)のAに該当する文
 に拡張した。宗教的な要素を加えて、主人公は信仰心がなく、同情心のない悪人
 として描いた。また、(6)の主人公が兄弟に親しくないという性格特徴が見られ
 ないが、(5)ではその特徴を強調せず、不孝な性格を際立たせている。全文は
 (5)のBまで、信仰心がなく、同情心のない親不孝な息子のイメージを描写し
 た。この部分については、了意は(6)と異なり、主人公の性格欠陥を強調して
 いる。(5)のBでは不孝な子が母親に不孝であることを明らかにし、その後は「母
 親」に不孝する内容で展開している。しかし、(6)では不孝の対象が「父母」で
 あり、その後の展開は「父親」に不孝する内容をめぐっている。(6)では父親がなぜ

(22) 浅井了意全集刊行会編『浅井了意全集』（仮名草子編5）、岩田書院、2015年、第364-365頁。
 (23) 『本朝故事因縁集』（日本国文学資料館蔵元禄二年刊）を参照。

病気になったかの説明がなく、やや唐突に見える。了意は(5)の母親が病気になった原因を親不孝な子の呪いによるものとし、(5)の波線部分に示されている。親不孝な子は母親が早く死ぬことを呪い、母親を責めて憂鬱にさせ、後にうつ病になった。この増やされた詳細は、作品の論理性を高めるとともに、親不孝な息子のイメージを強めた。

さらに、(6)と比較して、浅井了意は「母やまひにかかりて、食のあぢはひ心よからず、新婦をたのみて、ひとえの衣をうりて、そのあたひを彦大夫にわたし、これにて魚を買もとめてくれよといひしを、魚のあたひは取ながら、魚は更にもとめあたへず、隣の人あはれがりて鯉の羹ものをつくりて来りあたふるに、母にはまいらせずして、をのれぬすみてみなくひつくしけり。」の詳細を増した。このようなことが分かった隣人が母親に同情して「鯉の羹」を作ってあげたが、それを親不孝な子に盗み食われた。このような鮮やかな情節は(6)の「嘗て不出他人求て美物を調ふ。其子盗で食之、忽ち病て伏こと」という一文で簡潔に述べられている。物語の終わりは両作が同じく、「五日間家から出ない」、「人が犬に変わる」、「百日で死ぬ」などを書いたが、了意は文末で「不孝のむくひ目の前にあり」と明言している。一方、注目すべきは(6)の出典が(2)(3)(4)だと推察できることである。浅井了意はまず『適吉録』の「酸棗婦雷換狗頭」を元にして『堪忍記』を創作し、『狗張子』で再び同じテーマの物語を取録したが、これは了意がこのようなテーマの物語を好んでいることがわかる。

しかし、以下の点に注意を払う必要がある。第一に、孝行の対象が変わっていること。『堪忍記』では、孝行の対象は一般的に「母親」のみであり、父親への孝行の物語は見られない。例2の(6)で父親に不孝な物語も、母親に不孝な物語として翻案されている。了意の父親が西川であり、彼が父親が年を取ってから生まれ、了意幼くして父を亡くし、母に育てられたという論がある。⁽²⁴⁾了意は母親を非常に尊敬していた。『本朝女鑑』女式篇では、女性がいかに姑に孝行すべきかについて別の章で論じている。第二に、「美物」と「鯉の羹」。(6)では父が美物を求めるが、了意はそれを母が魚を食べたいという願いに変え、隣人が「鯉の羹」を作ることにしている。この点で、了意は隣人、鯉、鯉の羹という三つの要素を増しており、これらの要素は出典とされた(6)で見つけることはできないが、『迪吉

(24) 北条秀雄『新修浅井了意』、笠間書院、1974年。

録』で痕跡をたどることができる。図 I ⁽²⁵⁾ は『適吉録』第八卷の公鑑四の女鑑門の 1 ページであり、矢印が指している三つの物語は、それぞれ第一「酸棗婦雷換狗頭」、第二「喻氏孝免雷厄」、第三「姜詩妻事姑感鯉」となる。第一と第三はそれぞれ『堪忍記』の「滑州の狗頭新婦が事」と「姜詩が妻の姑に孝行なる事」の出典である。したがって、了意はこのページの内容をよく知っていると考えられる。「姜詩妻事姑感鯉」には二つの重要な要素が見いだせる。一つは「隣母」であり、これは(5)の「隣人」と非常に似ており、隣人の設定は了意が空想したものではなく、これを参考にしたものであろう。前者では隣の母と姜詩の母が共に魚を食べ、了意はこれに基づいて、(5)で隣人が鯉の羹を作り、母親と共に食べるシーンに翻案し、隣人の登場がより自然になり、隣人の「善」と親不孝な息子の「悪」が鮮明に対照される。二つは「鯉」である。隣の母が食べるものも、隣人が作るものも「鯉」である。したがって、浅井了意は『狗張子』第四卷の「母に不孝狗となる」を創作する際、『本朝故事因縁集』の「洛外人為犬」だけでなく、『適吉録』の「姜詩妻事姑感鯉」を中心に参考にしたと言えよう。さらに、『狗張子』の各物語の順序を見ると、「母に不孝狗となる」の次の物語は「不孝の子雷にうたる」であり、図



(図 I 『適吉録』第八卷公鑑四女鑑門)

(25) 四庫全書存目叢書編纂委員會編『四庫全書存目叢書・子部』、齊魯書社、1995年。明・顔茂獻『適吉録』(内閣文庫藏崇禎四年刊)を参照。

Iの「喻氏孝免雷厄」と非常に似ている。『迪吉録』では親不孝な妻が犬に変わる話を先にし、次に孝行な妻が雷を免れる話をしている。『狗張子』では不孝な子が犬に変わる話を先にし、次に不孝な子が雷に打たれる話をしている。この順序は図Iに記載されている物語の順序と完全に一致している。したがって、了意が『狗張子』を創作する際に『迪吉録』も参考にしたことがわかり、『迪吉録』も『狗張子』の出典の一つであると指摘できる。

おわりに

浅井了意作品の出典を探求することは、了意の仮名草子作品と中国古典文学との関係を研究する上での鍵であり、浅井了意研究にも非常に重要な課題である。現在、浅井了意の仮名草子の出典研究や類話考証は既に豊かな成果を収め、了意の作品と中国の古典との関係をさらに明らかにするための確固たる基盤を築いている。しかし、関連する中国の古典籍が多岐にわたるなどにより、数多くの仮名草子の出典問題は未解決のままである。『堪忍記』は了意の出世作の一つであり、『狗張子』は了意の最終作とされているが、この二つの作品の成立時期は離れているにも関わらず、典籍の使用には継承性があると考えられる。本稿では、『堪忍記』巻第六の「滑州の狗頭新婦が事」と『狗張子』第四巻の「母に不孝狗となる」の出典を比較研究し、『堪忍記』の出典である『迪吉録』も『狗張子』の出典であると指摘した。先行研究でも指摘されているように、『狗張子』の典拠は、ただ一つの原典によっているわけでは必ずしもないのである。よって、『狗張子』の出典研究は『伽婢子』などよりもさらに複雑である。だが、補助的な典拠をも丹念にさがすならば、複数の典拠を指摘することができると言えよう。今後の課題として、浅井了意の他の作品の出典を研究した上で、『狗張子』の出典を考察していく必要がある。

付記：本論文は南開大学アジア文明研究センターの研究助成金による成果の一部である。